

「漆かぶれ」

岸 三郎兵衛



私が暮らしている金山町は、少子化と高齢化が急速に進み、経済面では、古くからの基幹産業である農林業の町経済に占める割合は年々低下し、弱電や縫製など、この二十年余りの間に興った企業に多くが支えられている、東北地方の典型的な農山村である。

しかし、そんなありふれた町を、他町村と一味違ったものになっているのが、長い歴史を誇る林業の存在である。県内の数ある林業地の中でも、金山町の林業の歴史は古く、植林の始まりは江戸時代末期に遡ることができる。植林から伐採まで数十年の時を要し、一朝一夕に完成された仕組みを造れない林業にあつて、先んじて本格的な林業活動が開始されたことは、大きなアドバンテージとなり、町の周囲至る所に年を重ねた杉林が広がり、平均的な伐採時の樹齢が八十年を超える、他地域に容易に追従できない蓄積を持つた林業地を形成することになったのである。ここから産出された木材は、良質な金山杉として県内外に出荷されているが、金山町内でも、街並み景観造りの施策に後押しされながら、優秀な金山匠の手で杉の柱と白壁に象徴される金山住宅に広く使用されている。

私自身そんな林業を代々の生業とする家に生まれ、この道に入り三十年余り、林業の良さ、難しさもよつやく理解できるようになり、時には林業について話をする機会がある。そんな時、地域林業を守り育てていく上で重要

なことは、地域に住み、地域の自然に親しみ、地域の自然を愛し畏れる人々の存在であり、金山町には依然としてそんな人々が残っている、と話すのが常だったが、最近、この確信に不安を覚えさせられる出来事があつたのである。それは木の専門家である林業家としては、いささかお恥ずかしい話であるが、「漆かぶれ」に遭つたことだつた。

山から採つてきた木切れを、漆の木と知らず弄び、翌日からひどい漆かぶれに悩まされたのは、小学校時代のことであり、その後は仕事柄山に入ることがあつても、特別何事もなく、漆かぶれ等と言う言葉さえ忘れていたが、ひと月程前、頭の前から手先まで漆かぶれに覆われてしまつたことに驚かされたのである。原因は小学校時代のそれと同じで、私の容貌の変わり様を見つけた友人たちには、散々ひやかされ、その都度何度も事の顛末を弁解がましく言わざるを得ない羽目に陥り、林業家の面目丸つぶれであつたが、そんな折、ふと気が付いたことは、私の周りには、この何年もの間漆かぶれにあつた者がいない、ということだつた。友人にしても、私を指して異口同音に「珍しい」と言うほどであるから、恐らく共通の思いだつたのである。考えてみれば、私の少年時代には、心ならずも漆かぶれに遭遇した仲間が、野山での遊びが賑やかなる夏場になると、毎年何人も現れたような記憶がある。そんな身近な存

在であつた漆かぶれが、最近ほとんど見られない。「漆かぶれ」という言葉は、死語になつたのではと思えるほどである。漆の木が減つたのだからか。今も野山の至るところに漆の木があることは、秋の紅葉の鮮やかさで明らかだ。いろいろ考えてみたが、たどり着いたのは、山に入る機会が減つたから、との答えであつた。子供たちの世界では、テレビゲームが全盛となり、チャンバラや鬼ごっこ遊びは姿を消し、野山を駆け回る子供たちを目にするのは、自然豊かな金山でさえ難しくなつた。山菜やきのこでさえ、今や八百屋やスーパーの店頭に並び、一家を挙げての大切な仕事であつた山菜採りは、一部の愛好家のものになつてしまつた。「漆かぶれ」をキーワードにしてみれば、自然が身近にある金山町でさえ、想いとは反対の方向へ進んでいるようであり、特に明日を担う子供たちの自然離れには著しいものがあるように思われる。

外材の大量流入、材価の低迷、住宅建設様式の変化、林業就労者の減少等など、大きな曲がり角にある日本林業にあつても、こと金山町では、少なくとも林業を頑張り通せる素地は息づいていて、との私の確信に今も変わりはないが、将来を見据えた時、確信は不安に大きく揺れ動く。

ひどかつた漆かぶれは、ひと月程のうちにすっかり消えたが、代わつて、林業を生業とする家に生まれ、この数十年林業家であつた私にとつて、やり足りなかつたものが何なのか、問い掛ける声が残るこの頃である。

(金山町森林組合 組合長)